

view

視野

保育の日常と「ハレの日」

磯部裕子

(大学教員)

はじめに

幼稚園教育要領第3章に「行事の指導に当たっては、幼稚園生活の自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすること。なお、それぞれの行事についてはその教育的価値を十分検討し、適切なものを精選し、幼児の負担にならないようにすること。」と記されている。ここで、あえて行事の指導について特記するということは、わが国の保育実践には、行事の指導について留意せざるを得ない実態があるということを示唆している。

『現代保育用語辞典』に「行事保育」という項目がある。^{注1} 著者である岸井勇雄は、行事保育とは、行事を中心とした保育のことであると解説した上で、一九四八（昭和二三）年の保育要領では「幼児の情操を養い、保育に変化と潤いを与え、郷土的な気分を作ってやる上から、年中行事はできるだけ保育にとり入れることが必要である。」と、保育内容に行事を積極的に

磯部裕子（いそべひろこ）

宮城学院女子大学教授。専門領域：保育のカリキュラム論。保育内容の創造と環境とのかかわりについて実践者と協同して研究を続けている。

取り入れようとしているのに対し、その後の幼稚園教育要領が行事に対してむしろブレーキをかけるようになっていることを指摘し、その理由を「現実には、保育のために取り入れた行事が本末転倒して行事のための保育となり、幼児も保育者も無用の苦しみを与えられている例が少なくないからである。」と述べている。

行事が保育に変化や潤いを与えるものなのか、あるいは無用の苦しみを与えるものなのか、そこにある課題を検証してみたい。

「ハレの日」とっての行事

多くの園が、保育の年間計画の中に行事を位置付け、年度当初から行事を計画している。それらの行事を概観すると、日本古来の文化や伝統を伝え、日本独特の季節の変化を感じ取ることができるような「伝承的行事」、暦や地域に関係なく国民の行事として設定された「社会的行事」と共に、保育、教育の場ならではの行事がある。保育、教育の場ならではの行事としては、入園式、卒園式などの儀式としての行事、生活発表会や運動会などの保育のまとめや節目としての行事、さらには、園外活動や安全活動などの行事、などがあり、こうして見ると、保育の場における行事のありようは、一年間の保育内容を構想する上で、重要な意味を持つことになる。従って、「その教育的価値を十分検討し、適切なものを精選」することが必要となる。一つ一つの行事には、確かに意味がある。特に、伝承的行事のように、昨今の家庭環境では経験することが難しくなった行事などは、保育の場で体験できるようにしていくことも、これからの保育内容を検討していく上では、重要な視点かもしれない。^{※2}

一方、古来より、日本人は、ハレの日としての「行事」を日々の暮らしの中に位置付け、生活してきた。ハレの日である行事は「特別な日」であり、その「非日常性」に意味がある。この「非日常性」が保育の中に取り入れられることは、「変化や潤い」をもたらす上で、意味がある。しかし、保育という営為は、生活を通して行う。従って、保育内容の中心は、子どもたちの日常生活そのものである。つまり、日常としての「ケ」が、保育そのものということになる。日常の遊びを中心とした生活の充実があつてこそ、特別な日としての「ハレの日」が生きてくる。本来、変化や潤いを生むはずの「ハレの日」が、「幼児の負担」を生んだり、「無用の苦しみ」に至っているのは、なぜなのか、その背景を探ってみよう。

「成果の発表の場」としての行事

保育内容としての伝承的行事、社会的行事のありようについての検証は、別紙に譲ることとして、ここでは保育、教育現場ならではの行事、特に「保育のまとめや節目としての行事」について検討してみたい。なぜなら、「幼児の負担」を生んだり、「無用の苦しみ」に至っている行事の多くは、これに類するものだからである。具体的には、運動会や生活発表会などがこれにあたる。問題は、これらの行事が、保育の「まとめや節目」を超えた「成果の発表の場」となっていることにある。

繰り返しになるが、保育の中心は、生活そのものである。遊びを中心とし、生活そのものを教育内容とする実践である保育は、そもそも教科学習のように目に見える形で教育成果を示しづらい。しかし、教育という営為を実践している以上、保育の場においても、子ども

の学びの様子を明らかにしていくことは、保育者の責任でもある。従って、多くの保育者は、この「子どもの学びの姿」を何らかの形で、保護者等に発信しようと努力する。しかし、そもそも“invisible pedagogy”（目に見えない教育）である保育の学びの実態を整理し、わかりやすく発信することは容易ではない。昨今は、ドキュメンテーション、ラーニング・ストリーなど、子どもの学びの軌跡を言語化し、評価する研究と実践が進められているが、わが国の実践は、未だそこに至る十分な実践をつくり上げられずにいる。その結果、安易に教育の成果を“visible”なものにしようとする方向に転化していく。行事が、保育の成果の発表の場となれば、より見栄えの良いもの、より成果が明確なものとして発表しようとする力が働く。その結果、日常の保育のまとめではなく、発表の場としての行事に向かって「準備する実践」が生まれる。

保育が「準備する実践」となった時、それは、日常の生活そのものを大切にした保育の本質からは遠く離れた実践と変容していくことになる。

おわりに

イギリス海軍士官の指導で始まった「競闘遊戯」が起源とされる運動会は、今や学校行事の代表となっている。幼稚園でも多くの園が、運動会を大きな年間行事の一つとして位置付けている。

一方、徹底して保育の日常を大切にしたい保育内容を実践するために、運動会の開催を取りやめた園がある。そのことにより、子どもたちは運動会の準備や練習から解放され、保育者

たちは子どもと共に秋の自然を実感し、秋の暮らしづくりをじっくり楽しむ保育を実現している。そこには、運動会というハレの日の華やかさはないが、生活による保育の醍醐味がある。入園式さえも取りやめた園もある。幼子がハレ着を着て、緊張と不安の中で初めての幼稚園の儀式を経験することよりも、幼稚園の日常としてのケの日の楽しさを実感し、納得し、「またあした」を楽しむにできる始まりの日とすることに意味を見いだしたからである。

保育の年間計画は、それぞれの園が何を大切に保育をしたいのかという理念の検証の上に描かれるべきものである。行事もまた、「あるべきもの」から解放し、保育の日常の先にある「ハレの日」の意味を問い直すことから始める必要がある。

注

1 岡田正章他編『現代保育用語辞典』フレーベル館 一九九七年 p.119

2 筆者が二〇一四年に大学一年生を対象に行った調査では、節分の際に家庭で豆まきをした経験がある学生は50%程度であった。

3 レッジョ・エミリアの幼児教育は、子どもの学びの軌跡をドキュメンテーションとして記録している。またテ・ファリキのラーニング・ストーリーは、一人ひとりの学びや育ちの事実を記録する評価法として注目されている。